



地元の名門料亭「鯉保(こいやす)」で挙式を挙げた池田。夫人は栃木女子高卒で絵に描いたような栃木カップル

# 青春スクロール

## 母校群像記

### 活躍する経済人勉強してやんちゃして

栃木高校(以下、<sup>栃高</sup>高)OBで、東京を中心に県外で活躍する経済人も多い。

東京栃中・栃高会の会長として同窓をリードするのがみずほ信託銀行顧問の池田輝彦(67、1965年卒)。3年の時に東京オリンピックが開催され、陸上部の同級生が聖火ランナーに選ばれたことを覚えている。自身は市内で徒歩通学。電車通学生がうらやましかった。理由は「他の女子高生と一緒に乗車できるから」。とはいえ勉強と同じくらいいじつけも厳しかった。

同じみずほ信託銀行会長の野中隆史(62、70年卒)はスキー部と英語部。栃高祭で英



## 栃木高校 ⑤

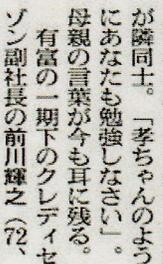
英語弁論大会では「We are the world」といった内容をスピーチしたという野中



語劇を栃木女子高の生徒と共演した。群馬県板倉町から通学。「真の栃高エリートは地元出身で、周囲の期待にも応え進んで来た人間を言う」と県外通学者の複雑な心境を交えて解説する。「理系にあらざる人は人にあらずという雰囲気があった」

ヤマトホールディングス社長を務め、現在ヤマト福祉財団理事長の有富慶二(74、59年卒)はバスケットボール部に所属。「どの運動部も部員の確保で苦労していた」。県大会一回戦突破が目標だったが、かなわず。体育館は古く「フリースローは梁の上を通らないとゴールできない」。

9月3日付で紹介した京大元副学長で愛知工大客員教授の入倉孝次郎とは同級生で実家が隣同士。「孝ちゃんのようにあなたも勉強しなさい」。母親の言葉が今も耳に残る。



有富の一期下のクレディセゾン副社長の前川輝之(72、60年卒)は、額縁に入った校訓や、棟方志功の版画が飾られた重厚な講堂で先生の講演を聞いたことが強く心に残っている。東京だけでなく地元にも親交を深めている仲間がいたことに、同窓のありがたさを感じている。

住友大阪セメント社長の関根福一(63、70年卒)は書道

セメント協会会長も務め、セメント業界が取り組む循環型社会の実現に奔走する関根



部。「何でもなこんなにな勉強するんだ」と思った。授業より書道に打ち込んだ。「王羲之」が書いた「蘭亭序」を手本にした臨書が会報誌の表紙を飾るほどの腕前。しかし先生に「書道は趣味の世界で楽しみなさい」と言われた。自習の時間に他クラスの体育の授業に出席して立たされたやんちゃな一面も。

関根と同期のクレハ社長小林豊(62、70年卒)は地元でも有名な呉服店の次男。「てつきり跡を継ぐものと思っ

実家から栃高まで目と鼻の先。駅から女子高生と話しながら歩いてくる電車通学生を見て「何て俺は不幸なんだ」と嘆いた小林



部。ケッコーマンの社長を務めた牛久崇司(故人、59年卒)も話題になった。2004年、創業家以外で初めて社長に。財務畑が長かったが「現場重視」を信条にした。

ジェーシービー会長の川西孝雄(65、67年卒)は兄の栃高への転入試験にくっついて行き、雰囲気が入って自分も入学。「ざっくりはんな男子校生活を送った」。当時の映画「戦場にかける橋」に感動。「世の中に橋をかける、道をつくる仕事につきたい」と土木系を志望した。文系に進んだが「銀行もカードも社会のインフラ整備という

「先生と生徒の距離が近く感じられた時代だった」と振り返る川西



意味で橋や道と同じ」と思い、社長時代は東南アジアを中心に現地消費者向けにカード発行を始めるなど「架け橋」の意志を貫いた。(敬称略)

東京栃中・栃高会は総会や勉強会、ゴルフ懇親会など活発な活動をして会員同士の親睦を深めている。会報誌「かいほう」も発行、会員の近況や催しの報告が掲載されている。ヤマト福祉財団の東日本大震災復興支援事業については「クロナゴの恩返し」(日経B Pビジョナリー経営研究所編 日経B P社)が詳しい。栃木高校についての情報はutsunomiya@asahi.comまで。